

連載 | ゆく言葉/くる言葉 — 4 | 古瀬 敏 [静岡文化芸術大学教授]

ゆく言葉 → バリアフリー

くる言葉 ← ユニバーサルデザイン

原稿を依頼される少し前に、あるビジネスホテルチェーンにおける法規違反が明るみに出た。最初の報道では条例違反だったが、実はハートビル法と建築基準法との双方に違反していた。ハートビル法(高齢者、身体障害者等が円滑に利用できる特定建築物の建築の促進に関する法律)違反という指摘に対するホテル側の釈明、障害者用客室は年に1回か2回使われるだけ、あとはいつ来るかわからない客に備えて空けておく専用室なので、あまりにも効率が悪い(したがって法規の要求はある意味で現実離れしている)、という言い方が問題の本質を示している。つまり、やらなければならないのは特殊解なのか一般解なのか、ということだ。

筆者は1997年秋に、建築研究所ニュースレター『えびすとら』18号「バリアフリーからユニバーサルデザインへ」を執筆し、急速な高齢化が待ったなしの見直しを迫っている、と述べた。影響がより深刻になっているにもかかわらず、バリアフリーが依然として身体障害者に限定され、特殊解であることに対して、すべての利用者にとって使いやすい建築物のあるべき姿を、ユニバーサルデザインという言葉で示したのである。10年近く経ってもまだ問題が正確に理解されていない、というのが率直な感想である。

バリアフリーは、身体障害者の利用を阻んでいる物理的なバリアを取り除こうとした。しかし、多くの国でこの要件を建築許可にあたって義務づけたのは米国でADA(Americans with Disabilities Act)が成立した以降、1990年代の半ば近くであり、わが国はその時点で努力義務で、誘導策もビジネスにとって魅力的ではなかった。

たまたまビジネスでも効果があったのは住宅で、それは住宅金融公庫が金利優遇や割り増し融資を省エネルギーと長寿社会対応にシフトさせたからである。人は誰でも歳をとり、ほとんどはそのまま自宅に住み続けなければならないから、長寿社会対応でないと困る。高齢対応バリアフリー3点セットが実はユニバーサルデザインである。

建築・都市は利用者である身体障害者を差別し排除してはならないというのがバリアフリーの論理である。しかし、来るべき超高齢社会では、自らを身体障害者とは認めないが、立派にその仲間、という高齢者の数が桁違いに増える。彼らも正当な利用者だと考えると、バリアフリーではなくユニバーサルデザインの理念に基づくしかなく、そうでなければ利用者が減っていくのみである。

こう言うと、わが国のバリアフリーはすべての利用者を対象としてきたと反論が出る。しかし、ユニバーサルデザインは「能力のいかんにかかわらず」であるのに対して、バリアフリーでは「障害」があっても排除されてはならない、という人権が出发点で、世のなかでは「障害」という用語が出てきた瞬間に、健康な人と障害を持った人、という二分法に絡め取られてしまう。

バリアフリーは、高度な自立支援技術などの議論に限るべきで、ひとつのもので多数の利用者を同時に満足させることを求められる建築・都市はユニバーサルデザインでなければならない。端的に言って、自動ドアやエレベータはバリアフリーではないだろう。

こせ・さとし

1948年生まれ/東京大学卒業/建築安全計画・建築人間工学・建築環境心理学/工学博士

著書に「ユニバーサルデザインへの挑戦」ほか、共著に「新版 建築学がわかる」ほか、訳書に「ユニバーサルデザインハンドブック」ほか